

俺と一色の御近所付き合い

時雨日和

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

今回の話は八幡が大学を卒業して社会人になりいろはが東京の大学に入っている話です。

ほとんど月毎の日常やイベントの話です。

※ずっと書いていかなかったのでもしかしたらこれから投稿するやつは今までと書き方を変更します。

## 目次

プロローグ	一色いろはの勘違い	1
第1話	久しぶりの会話	3
第2話	久しぶりの手料理	6
第3話	雨の日の帰り道	10
第4話	祭りの約束	14
第5話	七夕の願い	17
第6話	いつもと違う誕生日	22
第7話	告白の代償？	27
第8話	初めて	31
第9話	サプライズ	36
第10話	最後の文化祭	40
第11話	酒は飲んでも呑まれるな	43
第12話	何十分の一のクリスマス	47
第13話	正月の千葉の兄妹	53
第14話	甘くて苦い味	57
第15話	もう少いで	61
最終話	一色いろはの入社	65

## プロローグ 一色いろはの勘違い

八幡「だるい……やっぱ働きたくねえ……」

誰もいない部屋でソファにダイブしながらの一言、これがいつもの仕事から帰った時の恒例の言葉となつてしまった。東京の大学を卒業し、なんやかんやと東京にある大手企業に就職した。昔の俺が見たら笑うだろうな……専業主夫希望だったのに今では立派な社畜なんだからもんな。

八幡「…仕方ねえか……」

高校時代の幻想を拭い就職した。これは大いなる1歩な気がする。それはどうでもいいとして、とりあえず着替えよう。1DKの寝室の方へとゆつくりと重いおもりが付いているように向かつていった。

八幡「……ん？」

何か違和感がある、そう言えば部屋も少し変わったような……あと、人の気配がするような気がする。これは長年のボツチ生活で得たスキルだろう、たまに意外と役に立つ。いやそんなのはどうでもいい、とにかくこの気配は寝室にある。

八幡「ヤベエ……空き巣とかだったらどうしようか……そうだ、確か今日鍵をかけた忘れたような……でもさつきはちゃんと締まつた……逆にやべえじゃん！」

そして恐る恐る扉を開けることにした。ゆつくりゆつくりと開ける、少しずつ視界が広くなつていく、5畳程度の部屋なので開ければ目の前にベットがあるのだが……そこに人影がある、寝ているのだろうか。そこで1度扉を閉め、扉から少し離れた。

八幡「…誰かいた……やっぱ鍵かけ忘れてたか、何だろうか……あれか、多分隣とか上か下の人が間違えたのか……迷惑な話だ」

さてここからどうする？起こすか？放置するか？とりあえずもう一回開けてみようという事になり、先程と同じようにゆつくりと開けている時ベットで寝ている人影が動いた。それに比例するように俺もビクツと反応してしまい扉に足をぶつけた。意外と強い勢いでぶつかった為結構痛い。

八幡「っ！……」

「ん〜……」

八幡「!?」

今ので起きてしまったであろう人影が声を出して伸びをする。声からして女の人だった。暗闇で見えなかったが、さっきの拍子に扉が大きく開いた。そこで目が合った。

八幡「……………」

「……………」

八幡「……………」

「……………!？」

あ、ヤバイと思った時にはもう遅かった。

「いやあああ!!!」

八幡「うわあ!!」

釣られて叫んでしまった。すいません御近所の皆さん、夜遅くにでも俺、今ピンチです。

「だ、だ誰ですか!?空き巣ですか!?警察呼びますよ!!」

八幡「ちよ、ちよつと待つて下さい!ここは俺の部屋です!今仕事から帰ってきたばかりで扉を開けたらあなたがいて」

「そんな事ありません!!ここは私の部屋です!!」

八幡「う…ではあなたの部屋番号は何番ですか？」

「205号室です!」

八幡「……………ここ305号室ですよ」

「ふえ?」

八幡「本当ですよ、こちら辺にあるものは俺の私物ですし」

「あ……う……ごめんなさい!!!」

そう言つて彼女は出ていこうとした。そこで初めて彼女の顔を見るが。

八幡「ちよつと待つて……お前……一色か?」

いろは「え?……はい、そうですけど……もしかして先輩ですか!？」

## 第1話 久しぶりの会話

2人とも落ち着きリビングの方でテーブルに対面で座る。

八幡「つまり、酔っ払って1つ上の階に行ってたまたま鍵が開いてそのまま入ってほぼ記憶のないままベットで寝たという訳だな」

いろは「は、はい…」

八幡「はあ…なんて言うか…何も取ってねえよな？」

いろは「あ、当たり前じゃないですか！仮にも自分の部屋だと勘違いしたんですよ！」

八幡「まったくもって威張るところでは無いがな」

いろは「そ、そもそも先輩が鍵をかけ忘れるから悪いんです！」

八幡「う、そこを突かれると痛い…って待てなに責任転嫁しようとしてんだ？」

いろは「う…」

八幡「まあいいや、良かったな俺のところまで」

いろは「は？ 何ですか口説いてるんですか？ 流れでそういう事言うのちよつと無いんで無理ですごめんなさい」

八幡「久しぶりに振られたな、それにしても久しぶりだな一色」

いろは「そうですね、先輩が卒業してから1度もあつてませんでしたし、連絡もありますんでしたから。てっきり亡くなったのかと」

八幡「おいおかしいだろ、流石に死んだらどっかに連絡行くだろ」

いろは「でも先輩友達いないじゃないですか」

八幡「…そうだったな」

いろは「でもよくここまで気づきませんでしたよね、同じアパートで1階違いなだけなのに」

八幡「ある意味偶然何じゃねえの」

いろは「それでその…話を戻しますとやつぱりちよつとはわたしが悪いじゃないですかあ？」

八幡「いやちよつとじゃ無くてほとんどお前が悪いけどな、あとあざとい何を企んでやる」

いろは「もお、最後まで聞いてくださいいよお。それですぞね代わり

「といっては何ですが今度わたしが先輩にご飯作ってあげます」

八幡「は？」

いろは「だって見たところ先輩あんまり料理してませんよね？そこから辺にコンビニとかのお弁当とかカップラーメンとかのゴミがありますし」

八幡「まあ…そうだが」

いろは「なのでたまにはわたしが料理しに来ますよ。今回のお詫びという事で」

八幡「お、おう…お前料理出来たのか？」

いろは「失礼な！ わたしだってそれなりに出来るんですよ？ これでもしっかりと一人暮らし出来てますからね」ドヤツ

八幡「でも良いのか？」

いろは「そこで先輩です！」

八幡「は？ 何」

いろは「やっぱいい、先輩にもちよつとは非があるじゃないですかあ？」

八幡「(まーた何かあざとくしてきたな、ほんと何を企んでやがる) まあちよつとはな」

いろは「わたしが料理するんで先輩は材料買ってきて下さい」

八幡「……」

いろは「どうしました？ まさかお金無いとか」

八幡「いや違うわ、流石に材料買う程度はあるわ。いやなんつか、お前の事だから今度何か買って下さいとかいって何か割と高額なもの請求してくるのかと…もしくは『寝顔見たんで責任取って下さい』とか」

いろは「何ですか口説いてるんですか？ 久しぶりにあって遠まわしに口説いてるんですか？ もっと距離を縮めてからにして下さいごめんなさい」

八幡「またかよ」

いろは「とにかく明日お仕事終わりにでも材料買ってきて下さい、それで家に着いたら連絡くれれば行くので」

八幡「おう、何か悪いな」

いろは「いえ、一応お詫びですから」

いろは「それに…久しぶりに先輩にも会えましたし…」ボソ

八幡「あ？」

いろは「何でもないです。それで先輩まだわたしの連絡先とか持っています？」

八幡「ああ、お前が変えてなければあるが」

いろは「ならそれに連絡お願いしますね。それではおやすみなさいです」

八幡「ああ、おやすみ。気をつけろよ」

いろは「気をつけろって、1階降りるだけですからね」クスツ

八幡「そうだったな」

いろは「それではまた明日」

ドアバタン

八幡「まさかここに来て知り合いに会うとは思わなかったな」

まず知り合いが少ないから奇跡にも近いけどな。

そしてその日はすぐにシャワーを浴び明日早めに仕事に行くために眠ることにした。

八幡「……明日は残業出来ないな」



## 第2話 久しぶりの手料理

翌日いつもより1つ早い電車で会社に向かって早めに仕事についた。そして何故かいつもより仕事が捗った。

八幡「(うわ…何か今の俺めっちゃ仕事出来るヤツみたいだ！なんかスゲー捗る！……これは目的が出来たからか？…んな理由ないか)」

午前中何の問題も無しに終わった。いつも通り1人で屋上で静かに昼飯(パン)を食べている最中に携帯がなった。携帯には一色いろはと表示されている、電話だ。

八幡「もしもし」

いろは『もしもし、今大丈夫ですか？』

八幡「昼休みだから問題ない、どうかしたか？」

いろは『はい、今日の事なんですが』

八幡「ダメになったか？」

いろは『いいえ、違いますよお。材料の事なんですけど先に確認しておかなきゃならなかったんですが、今先輩のお家に何がありますか？』

八幡「あ？ あー…確か調味料は基本あったな、後は米と卵とマツ缶」

いろは『やっぱりマツ缶はあるんですね…そうですねえ、なら鶏肉とウインナーと玉ねぎと人参買ってきて下さい』

八幡「ちよつと待て、メモするからもう一回言ってくれ」

いろは『ええ、メモするの遅いですよ先輩、社畜根性がなっていないじゃないんですか？』

八幡「ばっかお前、俺ほど社畜っぽく見られるやつもそうそういないぞー！」

いろは『あはは…そうですねえ。しょうがないですねえ、もう一回言っただげますよ』

八幡「おう、サンキュー」

いろは『では、鶏肉とウインナーと玉ねぎと人参です。メモ取れま

した?』

八幡「おうバツチリだ、つてかこの材料だともしかしてオムライスか?」

いろは『おお、先輩分かったんですね。意外です』

八幡「ふつ、これでも元専業主夫希望だったからな」

いろは『専業主夫の人はあんなコンビニとかスパーのお弁当にばっかり頼りませんよ』

八幡「うぐ……」

いろは『あはは、では先輩また後です。楽しみにしてて下さいね』

八幡「はいはい」

いろは『それではお仕事頑張ってくださいね!』

八幡「お前も学校頑張れよ」

いろは『はい!』

そして、通話を切った。

八幡「(あいつ電話だとあざとくないんだな)」

そして昼飯を食べ終わり仕事に戻った。途中から何個か新しく仕事が増やされたが何とか定時までには終わらせる事が出来た。何でこんなにも必死なのだろうか。とりあえず久しぶりの定時で会社を出ることが出来た。そして帰る途中にいつも弁当を買うスーパーに立ち寄った。メモのとおり食材を選びレジに向かい会計をする時。

店員「あら?今日はお弁当じゃないの?」

八幡「え、ええまあ」

店員「そう、自分で食材買って料理する方がコスト的に安いんだからお弁当ばかりじゃダメよ」

八幡「俺が料理する訳じゃ無いし、これからも無いだろうな、いや料理するように心掛けよう、あくまで心掛けるだけだが」はあ、どうも」

そして会計を終え、そのまま帰った。その時既に6時辺り、ひとま着替えとシャワーを済ませてから一色に連絡を入れた。それから少ししてから。

いろは「せーんぱい!こんばんはですー!」ドアボタン

八幡「チャイムくらい押せよ」

いろは「いいじゃないですかあ、わたしだって分かってるんですしい」

八幡「あざとい、ほら買ってきたぞ」

いろは「ありがとうございますー、それでは台所借りますねー」

八幡「好きにどうぞ」

いろは「〜♪」

八幡「楽しそうだな」

いろは「何ですか？ それって遠まわしに毎日俺のためにご飯作ってくれて事ですか？ ごめんなさい遠まわし過ぎて分かりませんもう少しちゃんとした言葉でお願いしますごめんなさい」

八幡「もうわけわかんねえよ、料理好きなのかと思って言ったただけだっつーの」

いろは「料理は好きですよ、美味しいのを作れたら嬉しいですよ楽しいですよ」

八幡「はあ、そんなもんかねえ」

いろは「元主夫希望が何を言ってるんですかねえ」

八幡「元じゃない、俺はまだ諦めてねえよ」ドヤツ

いろは「うわ…」ヒキ

八幡「いや冗談だから、ガチの引きはやめてくれる？ 泣くよ？」

俺泣くよ？」

いろは「その脅しはどうかと思いますけどね」

そんなこんなで料理が終わり、テーブルに2人で対面に座り、一色が作ったオムライスが目の前に置かれる。

2人「いただきます」

八幡「……ん」モグモグ

いろは「どうですか？」

八幡「ん、んー……まあ美味しいな」

いろは「ホントですか?!」

八幡「あ、ああ……不味かったら不味いって言うし、美味かったら美味いって言う」

いろは「そ、そつかあ…良かったです」

八幡「…どうなんだ？ 学校の方って言うか就職とか」

いろは「はあ…はっ、何ですか？口説いてるんですか？わたしの全てを知りたいってことですか？ 流石にそれは狙い過ぎで気持ち悪いんで無理です」

八幡「そんなつもりはねえし、俺はどんだけお前に振られんだよ。なんかもう慣れてきたわ。そうじゃなくて、ただ先輩としてだな…つか今回のお礼っつかそんな感じで手伝えることなら手伝ってやろう…とか」

いろは「はあ、なるほど…でもそんな心配とかはありませんよ。これでもちやんとやってるんですから勉強とか」

八幡「へえ、ならあれから葉山とは？」

いろは「ふえ？」

八幡「なんだその反応あざといな」

いろは「そ、そんなつもりじゃ無いんですが、まあ葉山先輩とは…別に何も無いです。ほんと先輩と同じで卒業してから1度も連絡もしてません」

八幡「何で？お前葉山の事狙ってたんだろ？」

いろは「い、いやあ…まあ…気が変わったんですよ」

八幡「ふーん…そんなもんか」

つてな感じで雑談して一色は帰っていった。

八幡「はあ…何かいつもより疲れた…：…料理か…意外とポイント高いな…あいつ」

### 第3話 雨の日の帰り道

あの一色いろはは部屋間違え事件から約1ヶ月が経った。あれからはたまた俺が仕事から帰るとご飯を作りに来るようになった。まあ、そういうのは俺も凄く助かるから良いんだけど少し気が引けると言うか、それを一色に言ってはみたが。いろは「気にしないで下さい！これも練習ですから、先輩は練習台、言い換えれば実験台です！」なんて言ってたが、それも悪くないか……ってかあいつ練習の必要なんて無いくらい美味かったけど。

そしてゴールデンウィークが終わってまたいつもの社畜生活が始まり少しした時、いつものように無気力に出勤してから雨が降ってきた。そして昼には雨が止んで……

八幡「……：天気が悪いと気分も悪くなるな、弁当も不味くなる……パシシシ」

いつも通り雨が上がった屋上で一人で昼飯を食ってる時メールが届いた。

八幡「ん？珍しいなまた何か変な迷惑メールか？」

いろは『今日はご飯出来そうにありません(´・ω・´)(\*)——』  
人ゴメンナサイ』

八幡「何だこのメール……って今までメールなんてして来なかったのにな、最近ずっと来てるからなのか？」

八幡『そうか、わざわざ悪いな。気にするなよ、こっちが世話になってんだから』

それからすぐに返信が来た。

いろは『いいんですよ(＊・▽・)ノ先輩は気にしないでください、私が好きでやってることですから(＊・ω・＊)』

なんだよこのやり取り、勘違いしちゃうじゃないかいろは。とにかく今日は一色が来ないようなので帰りにスーパーで材料買って自分で作ることにして昼休みが終わり仕事に戻った。そして時間は経ち。10時前に仕事を終え電車で帰っている時。

八幡「くそ……：やっぱ少し残業しちゃうか、まだスーパー開いてるな

そこはラツキーだ」

その時

ポツポツ

八幡「雨か…ふっ、こういう時にも抜きりなく折りたたみ傘を常備している、社畜の基本なんて」

雨は駅に出る時には本降りに変わっていた。

八幡「はあ、俺は天気はまだ嫌われるとはな…もう10時過ぎか、早くスーパー行って早く帰ろう」

折りたたみ傘を開き真っ直ぐスーパーへと向かい、ある程度必要なものを買うスーパーを出て帰る途中。

いろは「せーんぱーい!!」

最近聞きなれる声と呼び方が聞こえる方へと目をやると、案の定一色ともう1人友達らしき人が店先で立っていた。

八幡「はあ…捕まった」

ため息混じりにその2人の方へと向かう。

八幡「…どうした?こんな所で」

いろは「それがですねえ、今日友達のお誕生日でそのお祝いでここのお店に来たんですけど雨降ってきちゃってえ…」

八幡「そうか、ならタクシーでも使えよ。つかまえてやるから」

いろは「ええでも家まですぐじゃないですかあ、それはちよつともつたないっていうかあ」

八幡「それでそっちの子は?タクシーつかうか?」

いろは「むう、無視しないでください!」

八幡「はいはいあざといあざとい」

友達「あ、私は大丈夫ですよ。私は傘持っているんで、いろはが傘忘れたみたいなんで待ってたんです。最初は送っていくって言ったんですけど、悪いから良いって」

八幡「はあ?何で?」

いろは「いやあ、もうそろそろで止むかなあ、なんて」

八幡「お前…今日はこの後明け方まで降り続けるんだぞ、明け方まで待つ気かよ」

いろは「まあそうなたら…先輩を呼べばいいかなあって」

八幡「おい、人をタクシーみたいに使おうとしてんじやねえよ。こちとら疲れてんだぞ社畜なめんな」

いろは「そんな所で威張らなくても」

八幡「しようがねえな…ほら傘貸してやるよ」

いろは「え？先輩は？」

八幡「俺はいい、走って帰る。それでそっちの友達は大丈夫か？」

友達「…は、はい私はこっちですので、それにここからすぐですから」

八幡「そうか」

いろは「それじゃ、また明日ね」バイバイ

友達「うんまた明日」バイバイ

八幡「ほれ傘、それじゃあな」

いろは「待つてください！」

八幡「…んだよ」

いろは「それじゃあ先輩濡れるじゃないですか」

八幡「良いんだよ俺は、お前が濡れるよりはましだ」

いろは「何ですか？それは俺がお前を守る的なあれですか？

ちよつとグツと来ましたけどやっぱりちよつとまだ早いと思うので出直してきてくださいごめんなさい」

八幡「…：はあ、もう何が言いたいか分かんねえよ」

いろは「とにかく、せっかく場所が一緒何ですから一緒に帰りましょうよ」

八幡「何お前、俺に歩いて帰って濡れろって言ってるの？」

いろは「違いますよ。つまりこういう事です！」

まだ渡していなかった傘に一色が入ってきた。

八幡「は？お前何してるの？」

いろは「え？先輩知らないんですか？これは相合傘と言って」

八幡「そんなもんは知ってる、何で入ってるんだって事だ」

いろは「だって、一緒に帰るならこうするしかないじゃないですか  
く」ダキッ

八幡「おい何腕に抱きついてんだ、離れる。あざとい」  
いろは「何ですか？ 先輩照れてます？」

八幡「ンなわけねえだろ」プイ

いろは「あは、さあ先輩行きましよ」

八幡「はあ……しようがねえな」

2人で傘に入りながら歩き始める。

いろは「先輩今日のご飯どうするつもりだったんですか？」

八幡「あ？ 適当にチャーハンでも作ろうとしてたけど」

いろは「おお、先輩が料理してようとしてたんですね。偉いですよ！」

八幡「上からだな、まあお前に言われたからな、少しでも弁当とかに頼らないようにな」

いろは「へへ、そうですかあ。あ、先輩」

八幡「ん？ なんだ？」

いろは「お仕事お疲れ様です」

八幡「お、おう……」

いろは「つて言うか、先輩何気に車道側歩いてるとかあざといです」

八幡「お前に言われてくねえよ、雨の日の車道とか危ねえだろ」

いろは「ならもつとこつちに寄ってください、先輩肩に雨当たってますよ」グイグイ

八幡「やめろ寄せんな（当たってるから当たってるからいろはす）」  
そして2人で家に帰っていった。帰った後シャワーを浴びて着替えてチャーハン作って食べて寝る前。

八幡「はあ……今日も疲れたな……また、明日も残業だろうなあ  
……何かもの足りねえ気分だ……」



## 第4話 祭りの約束

関東も梅雨入りした6月中旬の昼過ぎ

いろは「せんぱうい、ジメジメして気持ち悪いです」

八幡「それは部屋の事言っただよな？ 俺に対して言ってるわけじゃないよな？」

いろは「先輩何言ってるんですか？」

八幡「いきなりガチのトーンなるのやめてくんない、不安になるから。危うく自殺しちゃうよ？」

いろは「冗談ですよ、部屋です部屋。湿気が酷いじゃないですか」

八幡「しょうがねえだろ、雨降ってるから窓も開けられないし」

いろは「エアコン付けましょうよ」

八幡「お前……ここ俺のどこの部屋って分かってるよね？ ってかなんで俺の部屋に来てんの？」

いろは「だって先輩今日休みじゃないですか」

八幡「お前俺休みの日いつも来てんじゃん、何なの？ 暇なの？」

いろは「いいじゃないですかあ、来る代わりにご飯作ってるんですから、たまに私が材料買ってくる日もありますし」

八幡「まあ、その点に関しては感謝してる、俺も美味しい飯食えるのは良いし、割と健康的だし」

いろは「何ですか？ 口説いてるんですか？ まだ心の準備とか出来ないで無理ですごめんなさい」

八幡「それ前にも言われた気がする。それで夜はどうするんだ？」

いろは「もちろん夜も作ってあげますよ。先輩料理作ると言ってもチャーハンとかそんな感じのしか作らないんですもん、色が足りません」

八幡「男の料理なんてそんなもんだろ」

いろは「元専業主夫志望が何言ってるんですか、もっと栄養を考えないとダメなんですよ。体に悪いです」

八幡「まあそうだな」

いろは「です。だから私がちやんと栄養考えた料理を作って上げて

るんですよ」

八幡「何ですか？口説いてるんですか？」

いろは「は？」

八幡「ほんとすまないとおもっている」

いろは「ほんと先輩はしょうがないですねえ…あ、そうだ」

八幡「どうした」

いろは「先輩7月7日って予定ありますか？」

八幡「7月7日？…ん、あるな」

いろは「え!?あるんですか？」

八幡「おう、あるぞその日は仕事が休みっていう予定がな」

いろは「休みじゃないですかあ…」

八幡「ばっかお前、社畜の休み舐めんよ！」

いろは「今だって社畜の休みですけど？　すごいゴロゴロして暇そ  
うですけど？」

八幡「これがいいんだろうが、仕事で疲れた体を休ませるっていう」

いろは「とにかくやる事は無いんですね？」

八幡「あるぞお、ねr…」

いろは「寝る、ゴロゴロする、本読む以外でお願いします」ゴゴゴ

…

八幡「…無いです（いろはす怖い！なんで笑顔なのにそんなに低い  
声だせるの!?!）」

いろは「なら先輩！お祭りに行きましょう！」

八幡「ええ…」

いろは「何ですか？　そのあからさまにめんどくさそうな顔は」

八幡「だってどうせ人多いじゃん」

いろは「そうかもですけど、こんな機会滅多に無いじゃないです  
かあ、だからお願いします」

八幡「友達とかと行けば良いんじゃないか？」

いろは「友達は彼氏とかと行くみたいなんで…だから先輩しかいな  
いんですよ！」

八幡「…お前彼氏とかは？」

いろは「いませんよ？　いたらこんな休みの日に先輩の部屋になんか来ません！」

八幡「なんかとは失礼だな…」

いろは「だから先輩、お願いします…ね？」

八幡「っ…!!?!…!!?!…!!?!…!!?!…!!?!…!!?!…!!?!…」

いろは「えへへ、ありがとうございます先輩！」ダキッ

八幡「だあ！腕に抱きつくな！あざといつつの」／／／

いろは「えへへ、じゃあ先輩お願いしますね」

八幡「はいはい…」

いろは「それじゃあ、晩御飯の準備しますね」

エプロンを着てキッチンの方へ向かう一色。

八幡「…なんでああいう時はあざとくないんだよ…」ボソッ

いろは「何か言いました？」

八幡「何でもねえよ…」

## 第5話 七夕の願い

七夕の日 駅前夕方

八幡「(待ち合わせの30分前に来てしまった…なんだこれ、これじゃあ楽しみで待ちきれなかったみたいじゃないか…:…:はあ…:…:周りも見るからに『これからお祭り行きますよ』的な奴らばっかだし…:はあ…:…:)」

待ち合わせ30分前に駅前のベンチで座りながら一色を待っていた。今日は七夕祭りに行くようで、何故か駅前集合だった。家1階違いなのに。

~~~~~10分経過~~~~~

八幡「(…遅いなあ…:あ、俺が早すぎるのか、っーか大丈夫かな? ぼーっとしてるけど通報されないよね? 流石に大丈夫だよな?)

…:…:はあ、自分で思ってた悲しくなったきた。ん? 何か浴衣きた可愛い人がこっち方向に手振りながらこっち方向に来てる。あ、これはあれだ昔あった自分だと思って手を振り返したら後ろの人だったっていうトラウマだ。とりあえず無視だ)」

いろは「せくんぱくい!!」

八幡「(一色の声がするな、どこにいるんだ? あいつ)」

いろは「せんぱくい!」

目の前にさっきの浴衣着てた人がいた。顔を上げて顔を確認したら一色だった。

八幡「ああ…:一色か」

いろは「他に誰が先輩の事呼ぶんですか!何回も呼んだり手を振ったりしたのに反応ないですし」

八幡「悪いな、ちよつと昔のトラウマが…:…:良くあるだろ、自分だと思ったら後ろの人だったって」

と言いながら立ち上がる。

いろは「いや、良くありますけど…:わたしだって分からなかったんですか?」

八幡「まあ、いつもと違うし、浴衣着てくるなんて知らないし」ジー

いろは「えへへ、友達に借りてきたんですよ。何ですか？何か変ですかね？」

一色はクルクルと回ったりしながら自分の浴衣を確認している。

八幡「別に、かw……悪くねえんじやねえの」

いろは「え!?!先輩今『かわ』って言いかけましたよね?!可愛いって言いかけましたよね?!可愛いですか？」

八幡「う……ま、まあまあじゃねえの？つか、可愛い何て言いかけてねえし」

いろは「先輩はやっぱり捻デレですねえ、あざといです」

八幡「お前には言われたくねえよ」

いろは「もお……ま、いいです。それじゃあ行きましょう先輩」

八幡「はいはい」

そこから電車に乗り何駅か通った所で降りると、ほぼ目の前から既に屋台とかが並んでいた。

八幡「へえ、意外と祭りっぽいのな」

いろは「そうですねえ、ほら先輩行きますよ！」グイ

八幡「ちよ、何で袖つかんでんの？」

いろは「だって、浴衣着てますしい、それに人多いですからはぐれたら面倒じゃないですかあ。それとも勘違いしちゃいました？ごめんさいまだちよつと早いので出直してきてくださいごめんさい」

八幡「ちげえよ……はあ、まあいいやそれでどうする？」

いろは「そうですねえ、それじゃあまずは何か食べましょう。何食べたいですか？」

八幡「定番だが、たこ焼きとかじゃねえのか？定番とか知らねえけど」

いろは「そうですねえ、じゃあそうしましょうか」

たこ焼き屋の前

八幡「すいません、たこ焼き2つください」チャリン

店員「ありがとうございますー！」

いろは「あ……」

八幡「ほらよ」

いろは「やっぱり先輩あざといです」

八幡「何でだよ、別にこれぐらい普通だろ」モグモク

いろは「おいしいですね」モグモク

八幡「ん、まあそうだな、次はどうする？」

いろは「そうですね」

2人で色々な所を寄って、食べたり遊んだりした。

いろは「さて、先輩そろそろ上に行きましょう」

八幡「あ？上で何かあんのか？」

いろは「言ったじゃないですか！最後に花火があるって」

八幡「ああ…ってか、この時期に花火か結構早いな」

いろは「先輩それ言った時も言っていましたよ。とにかく行きましょ

う」グイグイ

八幡「引つ張んなって、伸びるから」

一色に連れられ上の丘の所に行き花火が始まるまで待っていた。

八幡「はく、意外と人少ないな」

いろは「結構穴場みたいですね、ほら先輩ここ座りましょう」

八幡「ん」

いろは「ふふん」

八幡「何でナチュラルに隣に座ってんの？」

いろは「逆に何で隣以外に座ると思っただんですかあ、あ、もしかしてまた勘違いしちゃいました？ごめんなさい結構良いムードですけどまだ早いですごめんなさい」

八幡「もう何度目だよ…まあいいや、好きにしろよ」

いろは「はくい♪好きにしますね」ギユ

八幡「おい、だからって何で腕に抱きつくの？磁石なの？」

いろは「何ですか？その例え、はっ、もしかして俺から離れられない的な例えですか例えがちよつとくとど過ぎるので無理ですごめんなさい」

八幡「おい、数分の内に2回も振られたぞ逆に凄いで」

いろは「はいはい、ほら先輩もうすぐ始まりますよ」

そう言うのと花火が始まる。始まると一色はおーとかほーとか言っ

てたな、表情もあざとさも消え素の表情だった。しばらく花火を堪能している。

いろは「……先輩」

八幡「ん?…」

いろは「…来て良かったですね!」

その表情は笑顔だった。これが、一色いろはの本当の笑顔なのだろう。

八幡「…そうだな……」

いろは「また…来年も来ましようね」

八幡「…機会があれば…と言うより俺もお前も縁があればな……」

いろは「えへへ、そうですね……」

まったく、こういう時には素の反応なのだろうな…本当に勘違いしてしまいそうだ。しばらくして花火が終わる。

いろは「さくて、終わりましたし帰りましようか…つと、きゃっ……」

一色が体勢を崩して転びそうになる。

八幡「つと、おいどうした? 大丈夫か?」

いろは「あ、ありがとうございます。ちよつと…ゲタの緒が切れちゃったみたいで」

八幡「ああ…しようがねえな、ほら」

いろは「え?…」

八幡「おぶってやるよ、ほらそのままだったら歩けないだろ」

いろは「やっぱり先輩はあざといです」

八幡「あざとくねえよ、ほら早く」

いろは「はい……」

八幡「さて、帰るか」

いろは「はい」

一色をおぶりながら歩いていると。

いろは「あ、先輩何か短冊に願い事書いて吊るすみたいですよ!やりましよう!!」

八幡「子どもかよ、しようがねえな」

近くのベンチに一色を降ろし、2人分の短冊とペンを持って片方を

一色に渡して書き始める。

八幡「……こんなもんか」

いろは「なんて書いたんですか？」

八幡「脱社畜」

いろは「先輩らしいですね」

八幡「うっせ、お前こそなんて書いたんだよ」

いろは「ひ・み・つです」

八幡「はいはいあざといあざとい」

いろは「もう……それじゃあ先輩おぶつて下さい、わたし吊るすので」

八幡「はいはい」

いろは「……はい、ありがとうございます。吊りましたよ帰りましょう！」

八幡「……そうだな」

そして2人で行きと同じように帰った。もちろんおぶったまま。

一色を部屋まで送り、自分の所の鍵を開ける時鍵を眺めながら。

八幡「……一色の願いねえ……やっぱあいつはあざとい……な」

一言呟きながら鍵を開けた。



## 第6話 いつもと違う誕生日

8月8日朝

八幡「……………仕事行きたくない」

俺の朝はこの一言から始まる。腐ってる目を一段と腐らせるようなクソ暑い朝、しぶしぶと起き上がり仕事の準備をする。朝飯は前日に一色が作っておいたものを食べ、部屋を出て、鍵をかけ、会社へと向かう。いつも通り、そう何も変わらない電車に乗る時も、会社に着いた時も、仕事をしている時も、昼飯を食べている時も、残業する時も、仕事が終わった時も変わらない。

帰りの電車9時前くらい

八幡「……………（いつも通りだ…誰にも何も言われずに終わった。今日…誕生日何だけどな…誰にも祝われなかったな）」

ボーツと席に座りながら窓の外を眺めていると、いつの間にか次で降りる駅につく頃だった。

八幡「……………何期待しているんだか」

ゆっくり立ち上がり開閉口の前に手すりにつかまりながら待ち、降りる。人混みの中をまるで俺を避けるようにスルスルと行き駅を出た。その時

「ヒツキー……………」

昔の呼びなれた呼び名、聞きなれた声。今では懐かしい、聞いた瞬間すぐにわかった。

八幡「…由比ヶ浜…か？」

呼ばれた方を向くと予想通り由比ヶ浜が立っていた。

結衣「うん、そうだよ。久しぶりだねヒツキー」

八幡「おう、お前…何か雰囲気変わったな」

結衣「そ、そう？」

八幡「ああ、なんつーか大人っぽくなったつーか」

結衣「そ、そうかな？えへへ…」

こういう雰囲気は変わらないけどな。

八幡「それで、どうしたんだ？誰かと待ち合わせか？言っておくが

ここ意外と何も無い所だぞ遊ぶならもつと他のところ」

結衣「ち、違うし！遊びに来たんじゃなくて…」

八幡「なら仕事か？お前の仕事ってこんなところまで行くような所なのか？」

結衣「違うって！仕事でもなくて…その…」

八幡「…もしかして迷子か？」

結衣「馬鹿にしてるし!?違って、その…ヒツキー…今日誕生日でしょ？だから、お祝いを言い。誕生日おめでどうヒツキー!!」

八幡「……………」

結衣「ヒツキー？」

八幡「おう…悪い、なんつーかそんな事言われるの久しぶりだからな。かれこれ何年も言われてないまである」

結衣「そつか…何か、ごめんね連絡も取ってなくて」

八幡「いやいいんだ、気にしてない。それよりわざわざそれを言いに来たのか？」

結衣「ああ…うーん、それもあるけど…他にも、あるんだ」

八幡「あ？何だ？」

結衣「えつとね、ヒツキー…」

八幡「おう」

結衣「…あたし、ヒツキーの事が好き!!」

割愛

駅前で由比ヶ浜と別れた後から雨が降り始めた。生憎今日は傘を持ってきていない、それに何故か走る気にもなれなかった。俺は雨に打たれながら歩いて帰っていった。そしてアパートにつく頃には全身がびしょ濡れだった。俺はゆっくりと階段を上がった。そして部屋の前に着いた。

205号室

チャイムを鳴らす。はーいという聞きなれた声とともに扉が開いた。

いろは「どちら様…って先輩!!どうしたんですか!?!びしょ濡れですよ!!」

八幡「いやそんなん知ってる、傘を忘れてな」

いろは「忘れたって…だったらわたしに連絡くれればいいのに」

八幡「お前呼んだら何か借りを作ったただの言って何か請求されそうだったからな」

いろは「そんなことしませんよ！わたしをなんだと思ってるんですか…とにかく風邪引いちゃいますから早く部屋に…：そういうえは何で先輩こっちに来たんですか？まさか！濡れたことを理由にしてわたしの所のお風呂を使って何かいかがわしい事でもしようとしてましたか!?ごめんなさい流石に気持ち悪くて警察呼びそうので無理です！」

八幡「飛躍しすぎだしそんな事しねえしそんな事大声でいうな！マジで通報されるじゃねえか」

いろは「はあ…：だったら何ですか？」

八幡「(ため息付きやがった…) いや、まあなんつーか報告を…な」

いろは「？何ですか？」

八幡「…：さつき由比ヶ浜に会って告白された」

いろは「え？…：う、嘘ですよね？結衣先輩がこんな所に来るはずが…」

八幡「俺の誕生日だから祝いに来たらしい」

いろは「そ、そうですか…：でも何でわたしに報告するんですか？」

八幡「それはだな」

いろは「あ…：先輩わかりましたよ。あれですよね、もう部屋に来るなって事ですよね？もうご飯作らなくていいって事ですよね？そうですよね、先輩もう彼女いるんですもんねわたしなんか邪魔ですよね」

八幡「おい一色」

いろは「いいんですよ、先輩。今までわたしのお節介ですから、先輩が気に止むことは」

そこから一色は俯く。

八幡「話を聞け」

いろは「な、何ですか？…：先輩…：」グスツ

八幡「…由比ヶ浜の告白は断った」

いろは「え？…：…何で…ですか？」グスツ

八幡「気になる…いや好きな奴がいるって言った」

いろは「え？好きな人…」

八幡「そいつはいつも俺の部屋に来て飯を作ったり話したりして、たまに一緒に買い物行ったり祭りに行ったりする。いつもあざとい後輩だよ」

いろは「それって…：…先輩…：それって口説いてますか？」

一色は俯いていた顔をあげ、涙目で上目遣いで俺の顔を見てきた。

八幡「ああ、口説いてる。一色、俺はお前の事が好きだ。久しぶりの再開から今まで飯を作ったり色々して貰って、たまに来れない時とかお前の飯が食えない時とか物足りないとか寂しいとか思っちゃまう。なんつーか…だから俺と付き合ってくれ」

いろは「…何ですかそれ？正直ちよつと…いえ結構重いです。」

八幡「…わる」

いろは「でも…」ギユツ

八幡「っ!お、おい」

いろは「先輩にそこまで思っただけ貰えるのは重い分プラスされて嬉しんです。しょうがないので付き合っただけあげますよ」ギユツ

八幡「お、おう…：…濡れるぞ」

いろは「先輩…：ここは先輩も抱きしめる所ですよ。ほんと先輩はへタレですね」ギユツ

八幡「うっせ…：ありがとな一色」ギユツ

いろは「ふふ…：そうですよ。わたしに感謝して下さい。ずっと…待ってたんですから…」ボソツギユツ

八幡「…：…悪い」ギユツ

いろは「さて、それじゃあ先輩早く先輩の部屋に行きましょう！早くお風呂入って下さい。その間に飯作りますから」

八幡「…：…悪いな」

いろは「何今更いってんですか。わたしは先輩の彼女ですからね、当然です」

八幡「そ、そうだな…行くか」

いろは「はい！あ、先輩待ってください！」

八幡「何だよ？」

いろは「先輩、誕生日おめでとうございます。はい、プレゼントです」

そうやって渡して来たのは腕時計だった。

八幡「お、おう…サンキューな」

いろは「いえいえ、いいんですよ」

八幡「それでその…俺だけ祝われるのもあれだから、ほらお前の誕生日とか祝ってないだろ？だからその代わりのお前の誕生日プレゼント」

いろは「先輩回りくどすぎて何言ってるかわかりませんよ。おお、ネックレスですか先輩にしてはセンス良いです！ありがとうございます！  
ます♪」

八幡「(一言余計だ…) あと…これ」

いろは「ん？鍵ですか？」

八幡「七夕…願いなんだろ」

いろは「!?せ、先輩！見たんですか?!」

八幡「見たんじやねえ、見えたんだよ」

いろは「そんなの一緒です!!」

八幡「あんま大声出すなよ、近所迷惑だ。ほら行くぞ」

いろは「もう！先輩の馬鹿!!」

そして部屋の前

いろは「あ、待ってください先輩。わたしが開けます」

八幡「ん、おう」

ガチャバタン

八幡「何で閉めるんだよ…」

ガチャ

いろは「おかえりなさい、先輩」

八幡「っ!?お、おうただいま」／／／

## 第7話 告白の代償？

次の日朝

予想を覆さず風邪をひいた。現在ベッドの上。

八幡「予想通り過ぎて笑えてきた」ゴホゴホ

いろは「もう…雨の中歩いてすぐに暖かくしないからですよ！まったく…まあ、嬉しかったですけど」ボソッ

八幡「はあ…風邪薬とマスクくれ、仕事行ってくるから」

いろは「何言ってるんですか!?!風邪引いてるんですから寝て下さい!会社の方には連絡しておきますから」

八幡「…会社休めるからいいか、でもお前は大学行けよ」

いろは「ええ、何ですか?大切な彼氏が風邪ひいてるんですよ?ここは看病しないといけないじゃないですか」

八幡「だからって…」

いろは「大丈夫です。単位もちよつとやそつと休むくらいじゃなんとも無いですし、就職先とかもある程度決まってるので」

八幡「…そうか」

いろは「だから、今日くらいはめいっぱいわたしに甘えてください」  
八幡「…助かる」ボソ

いろは「はい♪」

小さく言ったつもりなんだが、近くにいるせいか聞こえてたようだ。高校時代のようなあざとい笑顔ではなく、一色の素の笑顔だった。…語尾に音符とか付きそうな言い方なのはちよつとあざといけどな。

いろは「では先輩。お粥作りますのでちよつとだけ待ってて下さい」

そう言つてエプロンをつけながらキッチンの方に向かつていった。おかしい、変だ。いや別に一色がおかしいとかじゃなくて、俺がおかしい。風邪のせいとか、昨日のせいとか一色の一挙一動が…なんと言うか愛おしい。こんなにも変わるものなのか、今まで経験無いからな仕方ない…やばい何か意識してしまうと直視出来ねえ…

いろは「お待たせしました」

早っ!?!いろはすお粥作るの早っ!つてちげえさつきからもう40分経ってる!?!俺ただけ一色の事で考えてたんだよ!?!大好き過ぎるだろ!!

いろは「先輩どうしたんですか?何かさつきより顔が赤いような……熱上がりました?」

近くのテーブルにお粥を置いて、自分のおでこと俺のおでこに手を置いて熱を測り始めた。

八幡「っ!?!」

いろは「うーん……多分熱ありますね。安静にして下さいね」

ごめん無理だ。意識するなという方が無理だ。熱を測り終えた一色はお粥をもった。それに同調して上半身を上げお粥の入った器を受け取ろうとする。が

いろは「あ、待って下さい先輩。先輩は動かないで下さい。安静ですよ安静」

八幡「は?なら食べねえだろうが……」

いろは「大丈夫です。わたしが食べさせて上げますから!はい、あゝん」

八幡「っ!?!／／ば、ぼっ……お、おま……出来るわけ」ゴホツゴホツいろは「ほら先輩、安静にです落ち着いて下さい。大丈夫ですって、他に誰も居ないんですから。恥ずかしくくないですよ」

八幡「だ、だからって……／／」

何でこいつこんな平然と話してんの?いろはすのメンタルが凄……あ、前言撤回こいつも顔真っ赤だわ。

いろは「ほら先輩、あゝん」

八幡「っ／／……あ、あゝ」パクッ

……やっちまった。

いろは「どうですか?食べれます?」／／／

八幡「あ、ああ……何とかな、美味しい……」／／／

嘘です。恥ずかし過ぎて味なんてわかりません、つてかなんでお前まで赤くなってるんだよ。めっちゃ意識してしまうわ。

それから結局全部一色に食べさせて貰ってしまった。…まあ、一番  
恥ずかしいのは最初だけだったから……うん。

八幡「ごちそうさん」

いろは「はい、お粗末さまでした。では先輩、会社の方には連絡し  
ておきましたのであとはゆっくりと休んでいて下さい」

八幡「おう……あ、ありがとな」

最後にふふつと笑う一色を見てから眠りについた。

次に目が覚めたのは昼を少し過ぎた頃だった。おでこには濡れた  
タオルが置いてあった。

八幡「……感謝しないとな」

少し落ち着いたのか少しだけ体が軽い。だがまだ少し熱はあるよ  
うだ。そう思っていると一色がお盆を持ちながら中に入ってくる。

いろは「あ、起きましたね先輩。お昼ですよ、おうどん作りまし  
たから食べましょう」

テーブルにお盆を置いてうどんが入っている器を持ってさっきの  
ように。

いろは「はい先輩、あくん」

またか……

八幡「……あ、あー」／＼／ズルズル

一回やっただけあってさっきよりは抵抗は少なくなった。ただお  
粥よりは食べずらかったけど、でもやっぱ恥ずい……結局全部ズルズ  
ルと食でさせて貰ってしまった。昼飯も食べ風邪薬も飲んで少しし  
てから熱を測ってみると多少は下がっているもののまだ完全では無  
かった。

いろは「ああ、まだちよつと熱ありますね。ゆっくりしてて下さい  
ね、わたしはタオル濡らし直してくるので。また来ますけど何かあつ  
たら言ってください」

朝から思っていたが……妙に一色が優しい。これが風邪の効果か、そ  
ういえば親とかも普段そうでもないのに風邪とか怪我とかした時に  
限って優しくなる時あるな、あれと同じか。

八幡「あ、ああ……何か悪いな。大学も休ませちゃったし」



いろは「気にしないで下さいよ、先輩は病人なんですから。それに…昨日は嬉しかったですし」

後半から少しずつ顔が赤くなっていた。そうなるんなら思い出すなよ、俺まで赤くなるだろうが…

八幡「ま、まあ何だ。俺の方はもうだいぶ良くなった、だから気にしないで大丈夫だ。ゆっくり休んでくれ」

いろは「ふふ、わかりましたよ先輩」

一色がタオルを持って部屋を出ていってから俺はまた眠りについた。風邪になると無駄に眠くなるな。

次に目が覚めたのはもう既に部屋の中は暗くなってからだ。この時にはだるさもほとんど無くなって熱も引いていた。そして右手に違和感がありその方を見ると、一色が俺の手を握りながら眠っていた。いや休めとは言ったけども……。俺は上半身を起こした時、タオルが落ちた。そのタオルはまだ少しだけ冷たかった。

八幡「……………ったく、休めって言ったのに」

体を回してベットから足を出してベッドに座る体勢になり一色の隣に座る。

八幡「今日はありがとな、お前が居なかったらヤバかったかもな…」  
ボソナデナデ

左手で一色の頭を撫でてやった。心無しか一色顔が綻んだような気がした、暗いから見にくいけどな。

## 第8話 初めて

九月の下旬

夏も終わりを迎える頃、そろそろ秋に差し掛かり気温も過ごしやすいものに変わってきた。最近に残業する日も増えこの前なんかは何日か連続終電二本前くらいまで残業だったまでである。そんな時の休日はとても心地よい、仕事も終わりほんとにゆっくり出来る。よし今日はゆっくり寝るぞー。

いろは「せんぱーい！朝ですよー！」

……今日日曜だ。

いろは「せーくんぱーい、朝ですよー」

……ゆっくり寝ていたい。

いろは「先輩、起きてください」

……だんだん近づいてきてる。

いろは「……」スツ

八幡「!？」スツバツ

いろは「あ、起きましたね。おはようございます。先輩」

八幡「うんおはよう。…じゃない、お前何しようとした？」

いろは「そんなの決まってるじゃないすか、起きない彼氏の顔を近づけてする事なんてひとつしかないじゃないですか♪」

人差し指で自分の唇に当てながらニヤニヤしながらこっちを見てくる。うんあざとい、これはからかってるな。

八幡「……あざとい」

いろは「やだなあ、素に決まってるじゃないですかあ」

八幡「…何か懐かしいな、聞き覚えがあるわ」

いろは「それで先輩、朝ごはん出来てるので食べましょう  
スルーか

八幡「あー、はいはいわかったよ」

いろは「それでその後勉強見て欲しいんですよ。良いですか？」

八幡「あ？何でまた」

いろは「そろそろ大学の試験なんですよ。それに就職試験とかの勉

強もしとかないとですし」

八幡「あくもうそんな時期か、つてかお前ちゃんと就職するんだな」  
いろは「そうですね、流石に先輩の収入だけじゃこの先不安ですからね。わたしもしっかり稼がないと……今後のために」／／／  
おい何故赤くなる。せつかく意識しないようにしてたのに、だんだん顔が熱くなってきたわ。

八幡「っ／／よ、よくそんな恥ずかしい事言えるな……飯食う」  
そう言つて部屋を出ようとしたら、一色はクスツと笑つてから後について部屋を出る。

その後は朝飯食べて勉強とか洗濯とか色々して、昼飯も食べ終わつたころ。

八幡「それで？午後からはどうするんだ？」

いろは「もちろん午後も勉強しますよ、先輩も手伝つて下さいね」

八幡「いや、でもお前俺必要ないじゃん。何だかんだ言つて自分でほとんど解くし」

いろは「いいんです！先輩はわたしの隣に居てくれるだけでいいのです！」

八幡「お、おう……」

何でこいつはこうも恥ずかしい事を言えるのかね。そしてしばらくしてから一色は勉強に取り掛かった。俺はその隣で頬杖をつきながら一色の勉強を見た。案の定俺に質問も何もすること無くどんどん問題を解いていく。

八幡「……こいつ結構頭良いんだな。それにめっちゃ頑張り屋だし、世話焼きだし。何か最初に持った印象と全然違うな」

………

八幡「俺もいつもこいつに甘えてるな、何か恩返しとかしたいな」  
ナデナデ

いろは「ひゃ!？」ビクツ

八幡「おっと……悪い邪魔しちまったな。すまん」

いろは「い、いえ……びつくりしただけなので……」

八幡「お、おう……わるい」

いろは「あ、あの！」

八幡「ん？」

いろは「も、もつと撫でてください！先輩から何かやってくれるなんて珍しいですから！」

八幡「お、おう…」ナデナデ

いろは「ふあく♪」

八幡「…気持ち良さそうだな」

いろは「はい、気持ちいいですよ」

何かゆつたりしてる…

八幡「…………そろそろ終わりな、勉強に戻れ」パツ

いろは「あ…………う、わかりました。なら勉強が終わったらまた撫でてくださいね」

八幡「ああ、わかったよ」

またさつきと同じように一色は勉強に戻り俺は見てる。そうしてるうちにだんだんと眠気が来てしまう。

八幡「(やば…ちよつとまだ疲れ残ってたか。めっちゃ…眠い…………)」

そのまま頬杖をついたまま寝てしまった。

しばらくして意識が戻ってきた。すると疑問が湧いた。

八幡「あれ？俺座った寝たはずだよな？今横になってるっぽいな、あと俺下向いてたはずなのに上向いてるし、何か柔らかい…………まさか」

目を開けると、一色の顔がすぐ近くにあった。

八幡「っ!？」

俺はすぐに動こうとしたが一色は左腕で俺の上半身を押さえるようにして、右手で俺の頭を撫でていた。

いろは「あ、先輩起きましたね」

八幡「い、一色…な、な、何をしてるんだ？」

いろは「何って、膝枕ですよ♪膝枕。先輩寝ちゃうんですもん」

八幡「…………今何時だ？」

いろは「5時くらいです。ちなみに勉強も終わりました」

やべえ、3時間近く寝てた。しかも勉強終わってるとか、マジで俺  
要らなかつたじゃん。

八幡「すまん…勉強見てやるって言ったのに」

いろは「良いですよ。先輩最近お仕事で忙しかったですし、せっか  
くの休みですからね」

八幡「でもなあ、約束だったしな」

いろは「うーんそれならく……」／／／チラチラ

何で顔赤くなってるんだよ、何かチラチラ見てくるし。

いろは「き…キス…して下さい」

八幡「はあ!」／／／

馬鹿野郎、難易度が高え!!

いろは「だ、だって先輩…もう付き合って一ヶ月過ぎるのにキスも  
まだ何ですもん……」

八幡「い、いや…それはあ、あれだ…うんあれだ」

いろは「先輩…いや、ですか?」ウルウル

その聞き方はずるい…

八幡「嫌…という訳ではない……」／／／

いろは「それなら……」／／／パツ

一色は左腕を離して俺は起き上がり一色に向かい合う。心臓が高  
鳴ってるのがわかる、顔が赤くなってるのがわかる多分今までで1  
番。

いろは「先輩……」／／／

一色は上目遣いで俺を見てから目を瞑ってきた。この表情もずる  
い。

八幡「っ／／／／……」

……

八幡「／／／／／」チュ

いろは「ん……」／／／／

ほんの少し、たった2、3秒のキスだったと思う。だが何故か俺に  
は物凄く長いものを感じた。

いろは「ん…先輩……えへへ、わたしのファーストキスですよ」／

／／  
八幡「う…お、俺だつて初めてだよ」／／／  
いろは「これからは躊躇なくしてくれませよね？」

八幡「う…：…どうだろうな…」

いろは「えへへ、して下さいね」

最近一色の表情にあざとさが少なくなってきたのは、気のせいじゃない気がする。

## 第9話 サプライズ

10月中旬夕方

いろは「おじゃましまーす」

と、先輩から貰った合鍵を使って入ってきたので誰もいないんですけどね。今日も先輩は遅いんですかね、ならご飯の準備でもしてませんか。今日は何にしましょう。

それからしばらくして玄関のドアが開いた。わたしは急いで玄関に向かった。

いろは「おかえりなさい先輩!」

八幡「おう…ただいま」

いろは「お疲れ様です。ご飯準備してますから先にお風呂に入つて下さい」

八幡「ああ、悪いな」

いろは「それは言わない約束ですよ」

八幡「あ、ああ…」

照れてますね、先輩。いつもこんな感じなのに慣れないんですね、さて先輩がお風呂に入ってる間にちゃっちゃと用意しちゃいますかね。

そして用意が終わって先輩がお風呂から上がって一緒にご飯を食べる。うん、何か夫婦みたいですね。言ったら先輩照れて否定しますけどね。

八幡「ん?何か味噌汁の味がいつもと違うような?」

いろは「あ!先輩気づきました?実はいつものとお味噌を変えてみたんですよ、お口にありました?」

八幡「ああ、いつものも美味いがこっちも美味いぞ」

いろは「先輩って結構細かい所気づいてくれるんですね、それって結構嬉しいものですよ」

八幡「そ、そうか?」

いろは「でも!先輩からキスしてくれないのはポイント低いです」  
八幡「っ!!そ、そんな俺から出来るわけねえだろ?!もし仮にやった

としたらお前キモイとか言いそうだし」プイツ

めちやくちや照れてますね、顔そらしてますけど耳とかで赤いの丸わかりですからね。こういう先輩は可愛いですね、ていうかそんなこと言いそうですかね？……言いそうですね。

いろは「まあ、先輩ですからしよすがないですね。でも、いつかは先輩からちゃんとして下さいね？」

八幡「……いつかな」

いろは「待ってますから!!」

八幡「はいはい……」

しばらくしてご飯も食べ終わり、後片付けも終わってすこしだけまったりしている時。ある一つの事を思い出しました。

いろは「そうだ先輩！忘れてました!!」

八幡「んだよ、あんま大きい声を出すな何時だと思ってるんだ。壁ドンとか来たらどうすんだよ」

11時前ですなはい。壁ドン？わたし今どきの女の子なので壁ドンは恋のシチュエーションしか知りません。先輩いつかやってくださいごめんなさい。まあ無視しますね。

いろは「来週わたしの大学文化祭なんですよ、水曜日から金曜日の3日間なんですけど？先輩どれかで来れますか？」

八幡「来週か……」

と一言呟いてメモ帳を確認しています。こう見ると仕事出来る男みたいでかっこいいですね、目は腐ってますけど。

八幡「あー…悪い日曜とかなら空いてたけどな」

いろは「そうですか…ま、仕方ないですね。先輩にはこれからの為に稼いで貰わないといけませんからね、頼みますよ！」

八幡「はいはい」

いろは「まあもし何かの為に教えておきますと、わたしのところはカフェやりますから」

八幡「またありきたりな」

いろは「いいんです！」

そして時は流れ流れて文化祭の日、1日目、2日目共にお店的には



大好評でしたが、わたしの心は何とも言えない感じですね。この2日間朝は早くに行かなきゃならないので先輩に”行つてらっしゃい”も言えませんでしたが、やたら口説いてくる人が多かったですし…何とも言えないと言いましたが、実際最悪ですね。やっぱりあざというはだとうなつちやうんですね。そして3日目です。いつものように早めに家を出て準備します。何かもう準備してる最中からも一緒に回ろう的なことを言つて誘つてきてわたしの気分は最悪です。そして9時に開始された。開始されて何分か置きに色んな人からお誘いが来ましたよ、その度にお店の他の人たちに”いろはちゃん、お客さんだよ”つて言われました。ほんとごめんなさい、とりあえず来た人には笑顔でばっさりお断りしますから、一応問題は無いんですけどね。そしてお昼前そろそろピークかな?つて所でさつきまで少しだけおとなしくなつていたお誘いが来たようだ。わたしの方に微妙なかおをした店の人が

「いろはちゃん、またお客さんだよ」

つて言つてきました。まったく、そろそろ忙しいつて時に…はあ、早くお断りしてもど…ろ…う…!!?

いろは「せ、せ、先輩!!」

八幡「よ、よお…どんだけ驚いてんだよ。声デカイわ」

いろは「だ、だつて先輩今日はお仕事だつて…」

八幡「あー、何か日曜に人が少ないみたいでな、その日に行くことになつて、代わりに今日が休みになつたつて今日の朝に連絡が来たんだよ」

え、嘘?!先輩がいる。どうしよう、すつごい嬉しい…大丈夫かな?今のわたし、顔にやけてないかな?

いろは「そうでしたか、じゃあせつかくなんで入つて下さい!サービスしちやいますよ!」

と言つて先輩の手を引いて無理矢理中に入らせました。

八幡「おい引つ張るな」

いろは「はい、先輩こちらに座つてください。ご注文お決まりでしたらわたしを呼んでください」

八幡「お前限定かよ」

いろは「だつて先輩。わたし以外だとキョドって気持ち悪いですもん」

八幡「おい、ストレート過ぎんだろ。つか、何かテンション高くないか？」

いろは「良いじゃないですかー、わたしだつてテンション高くなるんです！」

八幡「まあ、文化祭だしな。無理もないか」

いろは「むー、いいですそういう事にしておきます。それじゃごゆっくりお決め下さい」

先輩からちよつと離れます。

友達「ちよつ！いろは?!どうしたの?今までの人達とは全然対応が違うんだけど？」

いろは「えへへー、まあね。あの人は別だからね」

友達「うわ、笑顔なのにあざとくないいろはだ。何なの誰なの？」

いろは「わたしの高校の時の先輩で、わたしのアパートのちようど上の階に住んでる目の腐ったわたしの彼氏だよ」

友達「えええ!!!いろはの彼氏!!!」

近くにいる人たちお客さんも含めて全員こつちを向きましたね、すごい恨めしそうな顔で。

いろは「ちよつとー?声が大きんだけど?まあ別に良いけどね」

友達「へえ…いろはに彼氏ねえ」

いろは「なに?何か不満？」

友達「いーやー?ただ何かいろはって自分のステータスとか気にしてそうな感じなのに、全然そういうふうな感じのしない彼氏だから意外だなんて」

いろは「あー、そういうのは高校の時に辞めたんだよね。わたしも本物が欲しくなっちゃってね」

そうやって私はあざとく先輩の方に向かっていった

## 第10話 最後の文化祭

いろは「ご注文はお決まりですか？先輩？」

八幡「あざとい…まあいいや、この多分オムライスっぽいものを1つ」

いろは「そんな変な言い回ししなくてもちゃんとオムライスですよ。かしこまりました。少々お待ち下さ〜い」

ルンルンと簡単な厨房みたいな所に行った。

いろは「ねえ、わたしが作ってもいいかな？」

友達「は？何でいきなり？」

いろは「だって、せっかくなら作ってあげたいから」

友達「はあ…まあせっかくだからね、こういう時に手料理とかいろはも乙女だね。さあどどんアピールしてやりなさいな！」

いろは「いやあ…まあいつも作ってあげてるんだけどね」

友達「は？」

苦笑いしながら言ったらすんごいポカンとしてる。わたしはそれを尻目にオムライスを作った。もちろんケチャップでハートも忘れずにね。

いろは「お待ちせしました先輩！こちらオムライスになります♪」

トレイで持ってきたオムライスを先輩の前に置いた。

八幡「おう、オムライスだな」

いろは「何当たり前のこと言っちゃってるんですか？とうとう馬鹿になったんですか？」

八幡「おい、前々からいずれなるだろう的な反応やめろ、そうじゃなくてだな…なんかこうこういう所って、変にアレンジ効かせてちよつとおかしなものが出てきそうだったからな」

いろは「む〜…先輩酷いです！そんなことしませんよ、ここは普通なんですから」

八幡「普通じゃなかったらやんのかよ。さて…あれ？おいスプーンが無いぞ？」

お？ やつとですか。

いろは「大丈夫です。ここにありますから」  
そう言ってわたしはスプーンを取り出した。

八幡「おう、サンキュー」

先輩が手を伸ばしてきた。それをわたしは手を前に出して制止する。

いろは「待った!!先輩、待てです!」

八幡「俺は犬か、何だよ。食べねえだろ?」

いろは「大丈夫ですって」

わたしは先輩の座ってる対面に座って持っているスプーンでオムライスをすくい、先輩に差し出し

いろは「はい先輩、あーん」

八幡「ぶっ!!?ば、馬鹿お前!!何考えてんだ!」

いろは「何って、先輩に食べさせてあげようかと思ひまして、ほらサービスするって言ったじゃないですか」

八幡「いらねえよこんなサービス!自分で食うわ恥ずかしい」

いろは「いいじゃないですか、家ではやってるんですから」

八幡「ぶっ!!!そ、そんなにやってねえよ!」

段々視線を集めるようになってちやいましたね。でもまだまだ終わりませんよ?

いろは「完全には否定しませんでしたね?まあそうですね、実際しましたしね」

八幡「いや、あれは不可抗力だろ!」

いろは「ほら先輩早く、大丈夫ですって、先輩の事なんて誰も見てませんから」

八幡「嘘だろ、めっちゃ見てるもん、こっちを凄い恨めしそうに「えいつ!」んぐ!」

はい大成功です♪

八幡「……………おい、一色」

いろは「えへへ、だって先輩ずっと口開けてくれそうに無かったんですもん。なら無理やりかな」

八幡「そこに行き着くところでおかしいだろ…」プイツ

案の定真っ赤になった先輩を見れて満足なので、スプーンを先輩に渡してわたしは他の接客に戻りました。

そして先輩が食べ終わる頃、店の奥で友達にこう言ってみた

いろは「あのさ…もう仕事抜けていいかな？」

友達「え？うーん…まあ、ピークもそろそろ終わるしいいんじゃない？せつかく最後の文化祭なんだし、彼氏さんと回ってきなよ」

いろは「ありがとう！千華（ちか）！先輩の次の次の次くらいに好きだよ！」

千華「それは喜んでいいのか微妙なラインなんだけど…」

千華に手を振って先輩の元に向かう。

いろは「先輩♪わたし、もう仕事抜けるので一緒にまわりましよう！」

八幡「ん？ああ、まあいいけど」

いろは「ならすぐに行きましょう♪」グイッ

八幡「わかったから、引っ張んなっての…あざとい」

いろは「素ですよ」

と言って腕を組みながら（わたしが一方的に）文化祭を先輩と一緒にまわりました。わたしの大学生生活最後の文化祭は、今までで1番の文化祭になりました。

## 第11話 酒は飲んでも呑まれるな

11月

朝起きると普通とは違う感覚を感じた。硬い、どうやら床に寝ていたらしい。そして、軽く頭が痛い。ふと顔を上げると隣のベッドで一色が寝ていた。

八幡「そうか…：そういや昨日は飲んだんだったな…」

昨日夜

次の日が休みのため結構な時間残業してしまった。いやまあ、休みの日が楽になるからそれはそれでいいんだが…：やっぱりキツイ。あと1時間もすれば日付が変わる頃の電車はかなり空いている、こうなると自然と眠気と戦う、電車つて眠くなるよな。俺だけか。そして、そのまま電車を降り真つ直ぐ家へと帰る。

八幡「ただいま」ガチャ

パタパタガチャ

いろは「おかえりなさいです。先輩」

八幡「居たんだな、遅かったから別に待つてなくても良かったのにな」

いろは「いいんですよ。わたしが居たいからですし、それよりも先輩、今日もお仕事お疲れ様です」

八幡「ん、ああ」

いろは「それでは先輩、ご飯の準備しておくので先にお風呂に入つてて下さい」

八幡「あいよ」

言われた通り俺は鞆を置き、風呂の準備をして、風呂に入った。疲れた体にはよく染みるとはよく言ったものだ、最近では土日も出勤の日があつたからゆっくり休むというのも明日が久しぶりだ。一色もそろそろ就職活動が始まるようだ、それなのにもいつも、こんな夜遅くに仕事から帰つてくる時まで待つていてくれる。ほんとあいっには頭が上がらないな。そして、こんなところで風呂から上がる、リビングには既にテーブルの上に俺の分のご飯が用意されていて、その向か

いに一色が座っていた。

いろは「さ、先輩。準備出来てますよ。明日休みですよね、お酒飲みます?」

八幡「おう、そうだな」

いろは「了解です。ならわたしも」

八幡「俺がとるからいいぞ、ほれ」

いろは「ありがとうございます。さすが先輩、あざといです」

八幡「お前にだけは言われたくねえよ。よっこいしょっと」

いろは「先輩おじさんくさいです」

八幡「うるせえよ」プシュ

いろは「ふふ、ではでは先輩、今日もお仕事お疲れ様です。乾杯」

八幡「乾杯」

こうして2人で缶ビール：もとい発泡酒を飲みながら俺は一色の夜飯を食べる。週末の休みの前の日の楽しみになりつつあるな、これ。

八幡「ん、やっぱり美味しいな」モグモグ

いろは「それは良かったです。疲れた後のご飯って美味しく感じますしね」ゴクゴク

八幡「それよく言うが、疲れてようが疲れてまいが美味しいもんは美味いよな」モグモグゴクゴク

いろは「それもそうですね」ゴクゴク

八幡「…なんかお前今日結構飲むペース早くね?」

いろは「そうですね?」

八幡「いつもならもつとゆつくりな気がするが」

いろは「そんな事ないですよ、でも最近は少しずつお酒に強くなった気がします」

八幡「そうだな、最初なんて自分の部屋と俺の部屋間違えるほどだしな」モグモグ

いろは「いいじゃないですかあ、そのおかげで先輩に会えたんですから」

八幡「はいはい」ゴチソウサマデシタ

いろは「先輩は嬉しくないんですか？」ウワメツカイ

おい、そんな感じで聞くなよ、そして寄ってくんな、可愛いけど。

八幡「お前：もう酔ってんのか？」アトズサリ

いろは「答えて下さいよ：」ギユツ

服を掴むなよ：くそつ、なんだよこの可愛い生き物は！ちよつと涙目ではほ赤らめて：

八幡「嬉しいよ、嬉しいから」

離してくださいませんか？

いろは「わたしもです！」ギユツスリスリ

八幡「お、おい／＼」

今度は抱きついてきやがった。そして頭スリスリして：くつそ可愛いなおい。俺さつきから可愛いしか言っていないぞ、語彙力低いな。

いろは「えへへ♪」ギユク

酔ってるからこれが一色の素なんだろうな：素直に可愛い、だが恥ずかしい、2人っきりの空間だが恥ずかしい。

八幡「：そろそろ離れるよ」ナデナデ

段々密着率が上がってきて柔らかいものがですね：

いろは「先輩：／＼」

抱きついてくる力が緩まり、一色が上げた顔は頬をさつきより赤く染め、力が抜けたようにトロンつとしていた。ほとんど無意識にしていた俺のなでなでも止まってしまふほど、今の一色は色っぽく、愛おしく感じた。

八幡「う：／＼」

そんな顔されたら我慢出来なくなつちまう：

いろは「せんぱい：ん／＼」チュ

自然と俺の方から一色にキスをしていた。キスはしていたが、今までは一色の方からだった。今回は俺からだった。その初めての俺からのキスの味はアルコールの味が強かったが、ほんのりと甘い味がしたように感じた。

いろは「ん：／＼先輩、やっと先輩からちゅーしてくれましたね／＼」



八幡「う／＼／た、たまたまだ／＼」

いろは「ねえ、先輩？」

八幡「…なんだよ」

いろは「わたしのこと、いろはって呼んでください！」

八幡「い、嫌だ」

いろは「ええ、何ですか？」ギューギュー

八幡「服を掴むな、引っ張るな」

いろは「いいじゃないですか…先輩からちゅーしてくれましたし…

わたし、待ってたんですからね？」ウワメツカイ

八幡「その言い方は…ズルイ」

いろは「いいですか？」ギュー

八幡「わかったよ…い、いろは／＼」

いろは「はい♪先輩♪」ギュー

八幡「抱きつくなよ／＼」

いろは「んゝ…」

ほんとなんだろうね、この可愛い生き物は、俺を萌え殺す気ですかね？

八幡「まったく…」ナデナデ

今度は意識的に撫でてやった。

そして時間は戻って

その後撫でてる間にいっし…いろはが寝て、ベッドに寝せてから俺が床に寝たんだっとな。

八幡「昨日だけでキャラ崩壊し過ぎだろ、俺もいろはも」ナデナデ  
なんて言いながらいろはを撫でている俺の顔は酷くニヤけた顔してるんだろうな。

## 第12話 何十分の一のクリスマス

12月

昨日イブが終わり、世間ではクリスマスとなっており騒がしく、とても活気のある1年の終盤のイベントである。だが俺にそんな余裕はない、昨日も今日も普通に仕事だ。

ただ、いろはの方はもう大学は休みのようだがな、なんて羨ましい。だが、今日は珍しく…というより初めていろはが弁当を渡して来なかった。

まあ、あいつもこの前就職試験受けたばっかで疲れてるだろうし正直俺なんか結構ってないでしっかり休んで欲しいものだ、と常常思っていたのでわりとちようどいい。

…やっぱ俺あいつに甘いか？いやこれはあれだ、いつもの労いというかそうあれだ。

というわけで昼は何か買って食おう。仕事場から出ようとした時声をかけられた。

「おーい、比企谷！」

「なんすか？後藤先輩」

今話しかけてきたのは今俺がいる部署の上司、後藤 淳也（ごとう じゅんや）さんだ。

かなり気の回る人で、入社した時から結構話しかけてきていたが、俺の誕生日を過ぎた頃から増えた気がする。

そんな人が俺の隣に並んで歩く。

「今日はいつもの愛妻弁当じゃないのか？」

「愛妻って…別に結婚してませんし、そんなんじゃないっすよ」

「でも彼女からのなんだろう？」

「…何で先輩が知ってるんすか？」

「何でって、お前が前に風邪引いて休むって時に連絡受けたの俺だからな。あれ、彼女だろ？」

「…そうっすけど」

「いいな、彼女いて、ってか今日クリスマスか、いいのか？」

「何がですか？」

「何って、クリスマスは彼女と過ごすもんじゃないのか？」

「そんな1日中一緒にいる必要はないと思いますけどね、俺は。なんだから毎日会ってますし、お互い部屋も上下違いなだけで会おうと思えばすぐ会えますし」

なんて言っている俺だが、朝は毎日弁当を作ってそのついでに朝食まで用意しているいろはが何の連絡もないのには少し不安がある。

「ふーん、彼女持ちってそんな感じなんだな」

「いや、俺を参考にしないでくださいよ。俺なんて今回が初めて何ですから絶対普通とはズレてますから」

今の発言に嘘はない。いろはじゃなかったら確実にここまで長く続いている自信がある。

というより彼女なんてできなかったと思う。

「まあいいや、とりあえずどっか食いに行こうぜ」

「いいですよ」

会社を出た後、適当に近くの飲食店に入って2人で昼食を取った。

その時にいろはから弁当を作らなかった事の謝罪とお仕事頑張ってくださいというメールが届いた。それに対し、気にするな休みくらははゆっくり休めと返信しておいた。

昼食を摂り終わり、また会社に戻って仕事を再開した。別段特別な事も事件もなく、ゆっくりと作業をしていた。

そして気づくと5時を、過ぎようとしていた。1度3時前に休憩を入れただけで、それからほとんどぶっ通しでやっていたお陰か、もう今日の分の仕事も佳境に入っているほどだった。

やばっ!?!めちゃくちゃ仕事出来てるじゃん俺!段々成長していく自分が怖いぜ…

なんて思っている間にも時間と仕事は進んでいき、6時頃には、次の日の作業の確認まで終わらせるほどだった。

冗談抜きでここまで出来るようになっていたのは驚いた、今までなら今日の仕事量なら少なくとも7時半は超えていたであろうものだった。

そして、そこで俺は帰ることにした。流石はクリスマス、会社を出た途端ちらほらとカップルが目につく。1つ我慢すれば電車まで少し時間がある…よし、ケーキを買おう。

~~~~~

無事に買い物を終了し、電車に揺られる。

(いろはの好きなケーキを忘れたからな…言ったら怒られるな)

割と早い時間での電車はラッシュとまではいかなくとも、席は満員の状態だった。

最近この光景も見てなかった事で悲しみに暮れていたのは内緒だ。そんな電車からおさらばして、帰路につく。イルミネーションとかで彩られていた駅前とは違い、アパートの方は明かりも少なく肌寒さが増すような気分があった。

寒さに軽く震えながらアパートについて部屋の前まで行く。

ガン、と扉を回してみたが開いていなかった。

いつもならいろはが来る時間を超えているはずだ、と思いながら鞆から鍵を取り出し家に入る。

当然電気も何もついていない、久しぶりに一人暮らしをしているという感覚が戻ってきて少し悲しくなった。

とりあえず着替えを済ませ、買い物したものを冷蔵庫に入れていろはの方の部屋に行くことにした。

俺の方の部屋を出て、1階降りているのはの部屋に行った。部屋の前に行つて扉を回した、すると、ガチャとスツと扉が開いた。が、中は電気も何もついていない。

「…?!」

この時何か不安な気持ちに頭が広がった。急いで家の中へ上がり、電気をつけて居間に入った。たまにいろはの部屋にも行くことがあったが、中は電気がついていないだけで変わりがなかった。

そして、寝室の方に行った。一応ノックをしたが、返事が無く恐る恐る入った。

寝室も別に変わったところはない、ただいろはが寝ていただけだっ

た。…鍵かけておけよ…

ベッドの横に座り寝ているいろはの額に触れてみた。案の定熱があった。…余計に鍵かけておけよ…危ねえな…

「ん…せ… ぱい…」

額に触れた時、息を漏らす音と寝言を漏らしていた。でも起きる気配はない。正直びびった…

ベッドから離れて洗面所に行きタオルを濡らし、いろはの額に乗せた。そして、台所に行きお粥を作ることにした。

「…頑張ってるな、俺も…」

適当にあと温めるだけで完成という所で止め、いろはの所に戻る。タオルで顔の汗を拭いていた時

「ん…あれ?…先輩?…」

「おう、起きたか?…」

「はい…どうして?…」

「家に帰ったらお前がいなかったからな、そんでこっちに来たらお前が寝てて熱出してからな」

「そう、だったんですか…ごめんなさい先輩。お弁当作れなかったばかりか、晩御飯まで作れなくて」

「気にすんなよ、つか、病人は気にしないで寝てるのが一番だろうが。逆に無理される方が迷惑だ」

「むう、言い方が酷いです。もうちょっと優しい言い方できないんですかねえ」

「むうとかあざとい。お粥あるけど、食べれるか?…」

「え?先輩が作ったんですか?…」

「他に誰がいるんだよ。待ってる、持ってきてやる」  
「何から何までありがとうございます」

「気にすんなって、前に俺が風邪引いた時に世話になった時の借りだ」  
「ふふ、さすが、先輩は捻<sup>テ</sup>レてますね」

その言葉をスルーしてお粥の準備をする。

そして、それを終わらせて寝室まで持っていく。

「電気付けるぞ」

「はい」

「ほれ、熱いから気をつけろよ」

「あーん」

「うるせえ、自分で食え」

「ええ、わたしが看病した時は先輩にたべさせてあげたじゃないですかあ」

「却下、そしてあざとい」

「むう、いいです。先輩からの手料理を存分に味わうので、ありがとうございます」

「拗ねるか、感謝するかどっちかにしろよ。天邪鬼か」

「フーフー、とゆっくりお粥を美味しそうに食べるいろは、ただのお粥なのにな。俺はそれを眺めながらぼーっとしていた。

「ごちそうさまでした、先輩。美味しかったですよ」

「お粗末様」

「それと…ごめんなさい折角のクリスマスだったのに」

「気にすんなつての」

「でも…折角の先輩と二人っきりのクリスマスなのに」

「いいだろそんなの」

「どうせ、これからもクリスマスなんて過ぎすじゃねえか…」ボソツ

「ふえ？…／＼／＼」

「…／＼／＼」

「先輩…それって…／＼／＼」

「うるせえ、病人は寝てろ／＼／＼」

と言つて無理矢理いろはを横にさせて布団を被せた。そして、俺は立ち上がる。

「どこ行くんですか？」

「…タオル濡らし直しに行くんだよ」

そう言つて寝室を出た。

(…勢いとはいえ、何で俺はあそこで言ってしまったんだー!!!)

と心で叫びながらタオルを濡らし直した。

最終的に朝までいろはの看病に終わった、これから続く、何十回分

の中の一のクリスマスの日

## 第13話 正月の千葉の兄妹

1月

正月、俺は今千葉にいる。正確には千葉に向かっているJRにいる。

まあ、正確には俺らにはになるが、いろはと一緒に帰省することにした。なんだかんだ去年からずっと忙しく、あまり実家にも帰れなかった。

小町とは連絡はとっていたが、ずっと会ってなかったのは寂しい。

「久しぶりですねえ、千葉」

「お前夏に帰ってただろ？」

「先輩と！一緒にいる千葉久しぶりですねえ」

無駄に強調して俺の方も見ずに2度目を答えた。

そんなに大事な事かよ…

「あー、はいはいそうですねー、あざといあざとい」

「なんですかー？そのやる気ない返事は」

「早く帰りたいんだよ。自宅大好きな俺としては」

「小町ちゃんに会えるからですか？」

「当然だ」

「うわあ…久しぶりの先輩のシスコンはキツイです」

うるせえ、こちとら何ヶ月も会ってねえんだよ。

「わたしだからいいですけど、普通なら捨てられていますからね？先輩」

「そうだな」

そんな相手今までもいた事ないし、これからもいないんだから気にすることも無いけどな…

「でも…わたしだって、そんな態度だったら拗ねちゃうんですから…」

ボソツ

ボソツと言って少しだけ俯いているいろは。悪いけど、俺難聴系じゃないから聞こえちゃうんだよ。

「…悪かったな。お前といるのが当たり前になって、無神経だった」

隣に座っているいろはも見ずにそっぽを向いて言っていた。



視界の端に映っていたいろはの顔が上がり、俺の方を見た。

「えへへ、分かればいいんですよ分かれば」

めちやくちや満足気な顔をしていたいろはをスルーした。このままだったら、俺めちやくちや顔赤くしそうだし。

心做しか隣に座っているお客さんの視線が痛い。ほんと、まじごめんなさい。

~~~~~

それからしばらくしてから千葉に着き、そのまま駅で別れてお互い帰ることにした。

お互い早く帰った方が良いといういろはの提案だった。なんだかんだと久しぶりの千葉を懐かしみながら、久しぶりの家路についた。まあ、1年そこらじゃ何も変わってなかったけどな。

そして、昼前に無事家に着くことができた。一応事前に小町に連絡をしておいたため、鍵は開いていた。

「ただいま」

と言って家に入るとリビングから小町が出てきた。

「あ、お兄ちゃんおかえり！会いたかったよ！あ、今の小町的にポイント高いー！」

「相変わらずだな、お前」

と軽く挨拶を済ませて2人でリビングに行った。

「親父たちは？」

「まだ寝てるよ、流石にお正月くらいはゆっくり休みたいって」

「ま、だろうな。社畜の気持ちは痛いほどわかるし」

「うわ、お兄ちゃんが遠い目してる…何かやだなあ、働くの」

「それ以上いくと、目が腐るぞ」

「やばっ！お兄ちゃんになるじゃん!!」

「うるせえよ」

そんな他愛ない会話をまったりとコタツに入りながらしていた。

「そーいや小町、お前就職どこにするとか決めたのか？」

「うーん…まだ悩み中なんだよね。本当はお兄ちゃんのとこの近くに

してお兄ちゃんと住もうと思っただけとお…」

「俺と住むつもりだったのかよ。やめとけよ、あそこ東京とか言うけどあんまり良いところないぞ」

「まあ、それもあるんだけどさあ…お兄ちゃん、どうせすぐにいろはさんと同棲しそうだし」

「……は？」

その発言に思考と動きが止まって、体が一瞬固まった。

「何言ってるの？お前」

「だって、部屋も1階違いでしかもほとんど毎日家に行ってるんだつたら同棲した方が良いじゃん？というか、小町は普通に思うと思っただけだよ」

「……一理ある」

「でしよう？」

「まあ…おいおい相談するか」

「まあ、そんな事より」

向かい合って座っていた小町が立ち上がって俺の隣に座り直す。

「小町は嬉しいよ。お兄ちゃんにいろはさんみたいな彼女が来て」

「俺も出来るとは思わなかったよ」

「そうだけど、でも、小町的には奉仕部のお2人も候補には入ってたと思っただけだなあ」

奉仕部、それを聞いて思い出す高校時代。なんだかんだ色んなことがあった、その中でいつも中心にあったのが奉仕部のあの、2人の…雪ノ下と由比ヶ浜の存在だった。

でも

「あいつらは…違うんだよ。上手く説明出来ねえけど、彼女とかじゃない、何か彼女程ではないけど特別な存在だ」

「うん、そうだね」

と言って小町は俺の肩に頭を乗せた。

「小町も早く、兄離れしなきゃね」

「言ってることとやってる事が合っていないけどな」

「今は大目に見てよ、久しぶりに帰ってきたお兄ちゃんに甘えたいの。」

小町はお兄ちゃんの事大好きだし。あ、今の小町的にポイント高い！」

「最後のが無ければはなあ」

苦笑いをして小町の頭を撫でてやった。ん、と気持ち良さそうな息が漏れる音がした。

「お兄ちゃんに彼女が出来て嬉しいけど…たまには小町の事も構ってね？小町に彼氏が出来るまで」

「小町に彼氏とか許さねえよ。仮に出来たとしても俺の前に連れてこい、面接してやるから」

「うわあ、流石にそのシスコンっぷりには小町でも引くわあ…」

「うるせえよ…」

「ま、とにかくおめでどうお兄ちゃん。ちゃんと幸せになって、幸せにしてあげてね？」

「おう。お前も何かあったら言えよ、ちゃんと力になってやる」

「うん！頼りにしてるねお兄ちゃん」

という比企谷兄妹の団欒だった。

## 第14話 甘くて苦い味

2月

今年度もそろそろ終盤を迎えるこの時期、最近忙しくて休みも取れなかった今日この頃、俺は久しぶりの休みだ。

いろはも論文とか提出しているため休みだ。というより昨日からこっちに泊まっている。

現在朝の8時、未だにベッドでスヤスヤと寝ているいろは。そして俺はと言うと朝食作りの真っ只中だ。これから何があるかわからないのだから少しは料理を出来るようにと少し前から始めている。特に、いろはが泊まりに来た時などだ。

そんな朝食のフレンチトーストを作り終えいろはを起こしにかか  
る。

「ほれ、朝だぞ。起きろ」

「んう…」

小さく息を漏らしながらもぞもぞと動く、だが起きようとはしない。相変わらず寝起き悪いな。

「おい、朝ごはんできてるんだ。冷めないうちに食うぞ」

「ん〜…」

……イラッ。

無理矢理布団を引き剥がし、遠くの方へ布団を投げる。現在は2月  
まだまだ朝は寒々としている、寝起きにこれはキツイ事はよく知って  
いる。

「ああ！酷いです先輩！寒いです！暖めてください！」

「おう、温かいコーヒーが淹れてあるぞ」

「もう…わかっているくせに！」

寒い日の朝はいつもこんな感じだ。

~~~~~

「先輩、夜ご飯の買い物に行きましょう」

朝の騒動から数時間後、現在3時過ぎ。いつもの買い物の時間であ

る。

「ん、おう」

2人でいつものスーパーに買い物に行く。ほんと、スーパーに近いと買い物で助かるよ。荷物持ちにはほんとありがたい。

「今日は何にするんだ?」

「今日はですね、カレーにしようと思います」

「カレーか」

「はい、嫌ですか?」

「いいや、別にそんなことはねえよ。カレー嫌いじゃねえし」

「先輩、わたしの作るカレー好きですもんねえ」

「は?何言ってるの?どれも同じようなもんだろ」

「うわ:酷いです先輩!そんな事言うんだったら先輩のご飯は塩だけです!」

「ごめんなさい。いろはのご飯が一番です」

「ふふん♪わかればいいんですよ♪」

脅迫じゃねえか:

こうして買い物も終わり、家に着いているははカレー作りを始めた。

そして、俺はまあ、適当に風呂掃除とかしてた。

そして夕食

「いただきます」

「どうですか?先輩」

「ん、ああ。美味しいな、何かいつもより甘く感じるが」

「流石先輩!味の事だけは!ちゃんと分かるんですね!」

「だけってなんだよ。あと強調すんじゃないか」

「今日はちよつと隠し味を入れてみたんですよ。なんだと思います?」

「あ?カレーだろ?ならリンゴとかじゃねえの?」

「ぶつぷー、残念不正解です」

なにその仕草、何かうざいんだけど。

「んで、正解は?」

「ノリ悪いですねえ…正解はですねえ。今日って、バレンタインじゃないですかあ？」

「おうそうだな」

「と、言うわけでチョコレートを入れてみました!!」

「へえ」

「…反応薄すぎませんかね？」

「普通だろ？おかわり貰うぞ」

「あ、はいどうぞ…」

案の定いろはは不貞腐れた。頬を膨らませ俺の方をてる。相変わらずあざとい。

「先輩のばーか」

「うるせえよ」

夕食が終わり、食器を洗い、お互い風呂に入り、各自まったりとしている。

そんな所にいろはが背中にもたれかかってきた。

「何だよ」

ここで重たいなど言った日にはガチでご飯抜きにされるので注意、俺も成長したな。

「……」

「おい」

「先輩のばーか」

「人に寄りかかりながら暴言吐いてくんじゃねえよ…ほれ、頭だせ」

「ん…」

そう言うといろはは正面に回り込んで、頭だけ俺に寄りかかってきた。そして俺はいろはのアタマを撫でた。

「…先輩は馬鹿です、ボケナスです、八幡です」

「だから八幡は悪口じゃねえっての」

ほんと懐かしいなそれ。

「…悪かったよ」

「ホワイトデー、期待してますから…」

「わかったよ」

「10倍返しですからね」

「はいはい」

「…ほんとにわかっているんですか？」

「わかっているって」

「…わたしの事好きですか？」

「ああ」

「ちゃんと言葉にして下さい」

「…」

「ああ、好きだよ」

「わたしは嫌いです」

「おい」

「…はい」

そう言っていたいろはの手には黒と青のマフラーがあった。

「ちよつと遅めですけど、まだ寒いのであげます。バレンタインですから」

「お前もひねくれてきたな」

「先輩のせいですからね。ちゃんと責任取って下さいね」

「ほんと、責任って言葉が好きだな」

「うるさいです。このマフラーで首絞めますよ」

「怖えこと言うなよ。ありがとな」

「ちゃんと10倍返しですからね」

「はいはい」

撫でながらマフラーを受け取り、寒い日はちゃんと毎日着けていこうと思ったまだまだ寒いバレンタインの話

## 第15話　　もう少しで

3月

年度もそろそろ終わりに近づいた今日この頃、4月から新入社員も入るとかどうとかの話を手ラツと聞いたりするが細かい内容までは知らない俺、いやまあ正直あまり興味が無いと言うか…いやまああれだよ。うん。

という訳で、遂に来てしまったよホワイトデー…そんな日なのに仕事だよこんちくしょー!

いやまあ、プレゼントは買ってある。お気に召すかは知らん、正直俺の自己満足だ。

「ねえ、ここってどうやれば…」

「え?ああ、ここはですね…」

と、先輩の社員から教えを請われた。良かった、教えて貰っていたところで。いや、なんで俺が教えてるんだろ?普通ここは俺が聞くことじゃね?

今日は定時で帰らせてもらった。残ってる仕事は明日とかにやれば何とかなるレベルだったたまにはね。

定時での帰りはやっぱり電車は混むな、座れもしなかったよ。

…高校生とかには俺もそこら辺の冴えないおっさんと同レベルなのかね。

電車を降りて駅を出て駅前の広場のところにめちやくちや見慣れたやつが絡まれてる。

「ちよ、君1人?これから遊ばない?」

「いえ、これから帰るので」

「いいから遊ぼうぜ、絶対楽しいからよ!」

「ほんと、いいですから」

…何あれ?何あいつ戸部の下位互換みたいなのやつに絡まれてんの?というか、懐かしいな戸部。

まったく…こう言うのは俺のキャラじゃ無いんだけど…

俺は歩きながらまだいろはに絡んでる奴の方…ではなく直接いろ



はの方に向かって手を掴んだ。

「ほれ、何してんだ帰るぞ」

「?!…先輩」

「ちよっ?!お兄さん?この子俺が先に見つけた子なんだけど?」

「…悪いけど、こいつ俺の彼女なんで」

「はあ?!なんでこんな奴」

「さあ?こいつに聞いてみてくださいよ。それじゃ」

と言つて強引にいろはの手を引きながら、その場から立ち去る。

…ほんと、慣れないことはするもんじゃねえわ。緊張した。

「……先輩」

「何だよ。つてか、何絡まれてんだよ」

「しようがないじゃないですか、あの人すつごくしつこいんですもん」

「まあ、いいや。ほれ荷物貸せ」

「別に大丈夫ですよ?先輩こそ、お仕事終わりなんですから少しくらい楽しても罰は当たりませんよ」

「…お、おう。なら交換しようぜ、俺のカバンの方が軽いし」

「…ほんと、どっちがあざといんですか。先輩の方があざといですよ」

「うっせーよ」

「まあ、ちゃんと彼女つて言ってくれた事は嬉しかったですし、かつこよかったですよ」

「…うっせ」

そう言つてそっぽを向いたが視界の端に映っているいろはの顔はニヤニヤと笑っていた。ムカつく。

そして、話しているうちに俺の部屋についた。俺はすぐに着替えてからシャワーを浴びた。その間にいろはは晩御飯の用意をして俺が上がってから少ししてから用意が終わり、2人で食べた。いつも通り美味かった。

その後片付けをしてからいろはがシャワーを浴び俺は仕事の準備をしながらプレゼントの準備もする。

…何かだんだん自信なくなってきた。いや、元々無いんだけどさあ

…

そうこう言っているうちにいろはが上がった。今はドライヤーで髪を乾かしている所だ。とりあえず小さいものは近くに置いておこう。

「ふう…上がりましたよ〜」

「おう」

「明日のお仕事は遅くなりますか？」

「ん、まあ、そうだな。今日が特別早かっただけでまた遅くなるかもな」

「そうですか。はあ、私もそろそろ働かなくちゃならないんですね〜、なんかヤです先輩〜」

「文句言うなよ、俺だって働きたくない」

「先輩はダメです。ちゃんと私を養わなくちゃならないんですから」

「…へいへい」

いろはは俺の隣に座ってきた。それから俺はとりあえず多分良さげな店で買った良さげなクッキーをいろはに渡した。

「ほれ、お返し」

「ふえ？あ、ホワイトデーですか。ありがとうございます先輩。先輩の事ならもしかしたら忘れてるんじゃないかな？って思ってたんですけど良かったです！」

「一言、一言余計だよ」

「まあまあ、へえ、先輩これいい所のやつじゃないですか。先輩にしてはいいセンスですよ！」

「ほんと、一言余計。ちよつと待ってろ」

「？」

俺は立ち上がって寝室の方に向かって隠していたもう一つのプレゼントを持ってくる。これこそ俺の自己満足なものだ。

「…これ」

「まあ、これから社会人になるんだしな必要だろうと思ってな」

俺が渡したのは女性用のスーツだ。さっきも言っていた通りこいつも来月から社会人になる。聞いても聞いてもどこに就職するとか教えてくれない。だからその職業に合わせた物とかは買えないがスー

ツはどんな仕事でも使うからな、実用性に富んだプレゼントだと自負している。

「…なんか、やっぱり先輩らしいです」

そう言っているのは笑っていた。

「何だよ。文句あるなら貰わなくていいぞ」

「ありませんよ。文句なんて。むしろとっても大事なものです。流石、私の事をちゃんと考えてくれてますね」

「…ブランドとかわかんねえからな。それなら実用性のあるもの買った方がいいと思っただよ。それに、そんな歳でもねえだろ」

「そんな歳って言われるとちよつと癪ですけど、まあそうですね。アクセサリーとか貰うよりも価値はあります。私は素直に嬉しいですよ。先輩」

「…そうかい」

隣に座っていたいろはが俺に寄りかかってきた。その体はシャワーを浴びた後でも暖かかった。

心做しか俺の体温も上がったような気がした。

## 最終話 一色いろはの入社

3月31日

「比企谷、ちよつといいか？」

夜の会社、今日も定時で帰れないのは当たり前だが普通に今9時。それにまだ仕事も残っている。オフィス内にはほとんど人がいない。そんな時に後藤先輩に声をかけられた。

「なんすか？」

「知ってると思うけど明日から新入社員が入ってくるんだが」

「いや、俺普通に知りませんでしたけど…」

「え？」

「え？」

嘘ではない。いや、明日から四月だから来るんだろうとは思ってたけど他のところもあるからここに来るとかは知らない。本当に、まあ、一番の理由は誰も俺にそういう話を流さないのが理由だけだ。

「聞いてないのか？噂とかにもなってたはずだけど」

「俺そういうの回ってくるようなタイプじゃないですし、他の人と仲良くないんで」

「…そうだったな」

ちよつと憐れんだような目はやめて欲しい。この人を見てると少しだけ葉山を思い出す。この人も結構顔はイケメンだし、何よりかなり慕われている。そこら辺の上司よりも慕われているんじゃないかと思うレベル。

ただ、葉山と違うのは俺がこの人の事を嫌いではないという点だ。この人は切り捨てる場面をしっかりと弁えている。葉山のように全員で仲良し小好しではない。この前なんか部下であろう人にめっちゃくちや冷徹な目をしてたの見た。怖くてすぐにその場を去ったけど。

「悪かった。俺のミスだな」

「いえ、そんな先輩のミスってわけじゃ…」

「いや、お前がそういうタイプのやつだったのを忘れていた」

この人天然で俺の心を抉ってくるな。

「まあ、いい。とりあえず明日新入社員が来るんだが…比企谷、お前にそいつの相手を任せていいか？」

「え？俺ですか？なんでまた」

「その子も大学卒業してすぐに就職って感じだからお前と歳も近いかな。それに、お前はこの前入ってきたとは思えないほど仕事ができるからな」

「買い被り過ぎじゃありません？それに俺対人能力低いですし」

小町はめちやくちや高いんだけどな…なんで兄妹でこんなにも差が生まれるのだろうか、兄より優れた妹って存在するんだな、勉強の方は俺のが上だけだ。

「それも勉強だと思ってくれ、今後何かあるかわからないしな。な？頼むよ」

「…わかりましたよ。先輩の頼みですし」

「助かるよ。仕事まだのこってるのか？手伝うよ」

本当にこの人は優しい。そして、人の扱いが上手い。あと、わざわざ俺に新しいやつの手相をさせるってことはなんかあるんだろうな…まあ、世話になってる人の頼みは断れない。

「ありがとうございます」

「おう」

ほんと、爽やかな笑顔ですね。

結局帰る頃にはもう11時を余裕で過ぎていた。仕方ない、明日新入社員に何を説明すればいいとかを相談してたから仕方ない。

部屋の明かりが見えたからまだいろはは居るのだろうと思ってたら案の定いた。俺がただいまと玄関で言うとわざわざ玄関まで来ておかえりなさいと言ってくれる。

「まだ居たんだな」

「はい、先輩が帰ってくるの遅いからですけど」

「遅いと思ったら帰っていい…って言っても聞かないのは知ってるから言わねえ」

「めちやくちや声に出してますけどね。言ってるのと同じですよ。でもよくわかってるじゃないですか」

「どんだけお前と一緒にいると思ってるだよ」

「これからもずっと一緒ですもんね？」

「…あざとい」

「む、でもでもこれが素直な気持ちだったりするんですよえ」

めっちゃニヤニヤしながら俺の方見てくるんだけど、やめて欲しい。

「風呂入ってくる」

「ふふ、はい、ご飯の用意してますね」

言った通りに俺が風呂から上がるとちようどいろはの方の用意も終わりご飯を食べた。いつも通りだ。そう、いつも通りだ。ごめんねつまらなくて、いつもいつもこんな書き方で…何てメタ話はどうでもいい。

「結局、お前の就職先どこだよ」

「明日まで内緒ですって、明日になったら教えます」

その応えにも飽きてきた。聞く度に明日、つまりは入社の日になるまで教えないと応える。何なの？まさかうちの会社じゃないよね？いや流石にないか、前に適当にうちの会社か？って聞いた時『どうですかね？あ、もしかして先輩、わたしと一緒に働きたいんですか？』ってニヤニヤしながら言われたからちよつとイラツとした。だからな、とは思う、予想としてはかなりの大穴だろうな、万馬券並みだ。

「はあ…」

「明日、楽しみにしてくださいね」

「何を楽しみにすればいいんだよ…」

~~~~~

翌日、せつかくだからいろはを送って行こうと思っただらどうやらかなり早い時間に出発していたようだ。そういえば俺も入社の際は早かったな…何て思い出に浸っていると会社に着いた。朝礼まではまだちよつとだけあったが『編集長』のデスクの近くにいないはずのな、やつが立っていた。

……おいおいおい…

「少し早いがこれから朝礼を始める。その前に今日から入社した一色君に一言挨拶して貰う」

「今日からこの『編集部』に勤めさせていただく事になりました一色いろはです。何分このような仕事には慣れていないもので皆さんにはご迷惑をおかけする事と思いますが、一日でも早く皆さんのお力になれるよう頑張つていきます。宜しくお願いします」

そう言つていろはは深々とお辞儀をし、それに対し拍手が起こる。俺も一応それに混ざつて拍手していたがきつと顔が引きつっているだろう。

「それじゃあ、一色君は比企谷に色々教えてもらうようにな。比企谷、よろしく」

「…は、はい…」

「それでは今日もみんな頑張るように」

朝礼が終わつた瞬間俺は後藤先輩を見た。後藤先輩は笑いながら俺に向けてサムズアップしていた。

…どうして俺の目論見は悪い方が当たるんだらうか  
そうこうしている内にいろはが俺の近くまで来た。

「先輩」

とつてもニコニコとしながら俺の横まで来た。いや、ニコニコじゃないな、ニヤニヤだな。

「…楽しみつてこれかよ」

「はい！どうです？驚きました？」

「…はあ、まあな」

「えへ、それでは先輩。これからも先輩後輩としてよろしくです！」  
とびきりのあざとい笑顔でいろはは言った。どうにも俺はいろはには敵わないと感じてしまふ。

今いろはは俺のデスクの隣にいる。形は変われど俺といろはのご近所付き合いはこれからも続いていく。